（ 様式D－２ ）
（ 別　　紙 ）

令和６年度　海外派遣研究員研究報告書〔研究実績〕

令和８年４月27日

日本大学理事長　　殿
日 本 大 学 学 長　　殿

所　　属　　芸術学部（芸術研究所）
資格・氏名　　准教授・坪井麻衣子

令和６年度海外派遣研究員（長期）の研究実績を，下記のとおり報告いたします。

記

１　区　　分　　長期

２　研 究 課 題

風景を主題にした絵画の変遷と精神の表象にまつわる絵画に関する研究

３　派 遣 期 間　　西暦 2025年　3月10日　～　　2026年　3月15日

４　派　遣　先　　○英国・ドイツ・イタリア・フランス・アイルランド

５　研 究 目 的

私はこれまで、日常における心のちいさな揺れをきっかけに風景を主題とした制作を続けてきた。本研究の目的は、油彩画の礎を担ってきた欧州諸国において、自然や場所に対する作家の「心の揺れ」が作品にどのような影響をもたらすか、また「心象を描くこと」が現代においてどのように作品として成立し得るかを調査することにある。パウル・クレーが「芸術は見えないものを見えるようにする」と唱えた通り、目に見えない心的リアリティを絵画表現に活かすことは表現の根源に関わる課題である。これまで日本国内に限定して行ってきた「心的表象」の研究を、本派遣を通じてロンドンを拠点とし、西洋芸術と比較・検証し、制作者としての見地からその重要性を立証することを目指した。

６　研 究 概 要

①研究の方法

本研究では、パウル・クレーの「芸術は見えるものを再現するのではなく、見えるようにする」という思想を起点とし、心的リアリティを絵画表現に活かす重要性を検証した。派遣期間中は、以下の点について調査・制作・交流を並行して行い、考察を進めた。

・歴史的変遷の調査:各国の主要美術館・画廊を巡り、写実主義から象徴主義、表現主義に至る風景画の変遷を、現物作品の鑑賞を通して調査した 。

・制作（レジデンス利用）:ロンドンのフローレンストラスト（Florence Trust）にスタジオを構え、調査で得た知見を踏まえ油彩画制作を行った。
・対面取材と学術交流:現代絵画の制作過程における心的リアリティの表象を探るため、作家へのインタビューを実施した。制作を行っていたフローレンストラストには、英国のみならず多国籍な現代作家が集まっており、多様な文化的背景を持つ作家たちとの対話を通じて、精神の表象に関する実制作の現場に即した調査を行った。
・成果発表:リーズ大学（University of Leeds）での個展開催を通じ、作品の公開と鑑賞者への伝播を検証した。

② 渡航先での活動内容
■ 2025年3月中旬 〜 4月：イギリス（ロンドン）
・制作環境の基盤整備：ロンドンでの生活および、制作拠点となるフラットの環境を整え、今後の研究活動に備えた。また、
・画材の検証と実験：日本での制作環境とは異なる欧州の画材の中から、自身の表現を維持・発展させるために使用可能な素材を探索し、実験的な検証を行った。
・主要美術館の初期調査：ナショナル・ギャラリー、テート・ブリテン、テート・モダン等を巡回。西洋絵画の基礎的理解を深めるとともに、今後の研究の視座を確立するための事前調査を行った。
・展示活動の計画：現地での発表の機会を探るため、アートフェアの調査をし、6月にハムストッドのキース・ハウス（Keats House）庭園で開催される「キース・ハウス・アートフェア」への参加が決定したので、出品に向けた制作を開始した。
■ 2025年5月：ドイツ（ベルリン・ドレスデン・ライプツィヒ）
ドイツにおける伝統的なロマン主義から、戦後の現代絵画（新ライプツィヒ派）に至る「内省的風景」の系譜を調査。
ベルリン：
アルテ・ナショナルギャラリー： C.ロットマン、C.G.カールス、K.F.シンケル等、ドイツ・ロマン派の風景画を調査。自然に自己の精神を投影する描写の根源を分析。
ベルリン絵画館：フェルメール、ルーベンス等、17世紀フランドル・オランダ絵画を視察し、光の扱いと物質感（マチエール）の関係性を精査。
ドレスデン：
アルテ・マイスター絵画館：レンブラント、フェルメール等、王宮コレクションの系譜を通じ、古典絵画における光の象徴性を鑑賞。
ライプツィヒ：
ライプツィヒ造形美術館：A.カラーム、W.ライスティコフ等の作品を通じ、写実から主観的表現への変遷を辿る。
G2 Kunsthalle：ヒルデブラント・コレクション展にて、ネオ・ラウフやD.リヒター、A.クヴァデ等、現代ドイツ絵画の最前線を網羅的に調査。

シュピネライ（旧紡績工場跡）： EIGEN + ART 等の主要ギャラリー10 箇所以上を巡回し、現代の制作現場と現代作家を扱うギャラリーを視察。
■ 2025 年 6 月：ドイツ・イタリア・イギリス
ドレスデン（ドイツ）：
アルベルティヌム美術館： 常設展（モネ、リヒター等）に加え、V.ティルマンス「Weltraum」展を視察。
ノイエ・マイスター絵画館： C.D.フリードリヒ『月を眺める二人の男』、J.C.ダール『ドレスデンの夜景』等を精査。月光や夜景がいかに「心的リアリティ」を映し出す装置となっているかを現物調査。
ミラノ（イタリア）：
20 世紀美術館 / ブレラ絵画館： 未来派からモランディ、モディリアーニ、アフロ・バサルデッラ等を調査。西洋絵画の形態の変容と精神的表出を分析。
プラダ財団：現代的な空間における展示構成の多様性を視察。
イギリス：画家 Lucy Cade のスタジオを訪問。技法や制作背景について意見交換を行う。
■ 2025 年 6 月～2026 年 2 月：イギリス
ロンドン（フローレンストラスト）：これ以前は自宅フラットで制作していたが、6 月より歴史的な教会建築を利用したスタジオ「フローレンストラスト」を拠点に制作。現地の作家との対話や定期的な「クリット（講評会）」を通じて、自身の表現を客観的な文脈で捉え直す機会を得る。
■ 2025 年 7 月：イギリス（ロンドン）
サーペンタイン・ギャラリー： ジュゼッペ・ペノーネ展にて自然と身体の等価性を、アルピタ・シン展にて物語的表現と内面性の関係を調査。
ナショナル・ギャラリー：西洋美術史のマスターピースを再考。
■ 2025 年 9 月 ～ 10 月：フランス・イギリス
パリ（フランス）：
ブルス・ド・コメルス / ヴィトン財団：大規模な現代美術コレクションを視察。
オルセー美術館：ボナール、ルドン等、象徴主義における「内面的な光」の表現を調査。
ギャラリーMarguo：現代作家のグループ展を通じ、パリのアートシーンを視察。
その他、ピカソ、ロダン、ジャコメッティ、ブールデル各美術館にて、形態の解体と精神性について知見を深める。
ロンドン（イギリス）：
フリーズ・ロンドン：世界的なアートフェアを視察。多種多様な作品群に触れることで、現代における表現の動向を調査する。
テート・モダン：ピカソ展を通じ、多角的視点による空間再構成を研究。
■ 2025 年 11 月：アイルランド・イタリア
アイルランド：

ウイックロー：現地のグループ展に参加。自身の作品を展示し、アイルランドの観客やアーティストとの対話を通じて、表現の普遍性を検証。
ダブリン（IMMA、ダグラス・ハイド等）：アイルランド特有の歴史と風土が投影された現代表現を視察。
フィレンツェ（イタリア）：
サン・マルコ美術館：フラ・アンジェリコ展を通じ、宗教的表象と静謐な精神性の表現を再考。
ウフィッツィ美術館/ストロッツィ宮殿： 西洋絵画の古典的基礎である光と色彩の扱いを再確認。
■ 2025年12月：イギリス・イタリア
ロンドン（イギリス）：
コートールド・ギャラリー：W.ティーボー展にて、物質感と色彩の構築を調査。
サーペンタイン・サウス：ピーター・ドイグ展にて、記憶と風景が交錯する現代風景画を観察し、自身の制作へのヒントを探る。
トスカーナ・アレッツォ（イタリア）：
風景画現地調査：R.Ghezziの「Paesaggi Assoluti」を視察。自然そのものを制作プロセスに取り込む手法を学ぶ。
■ 2026年1月 〜 3月：イギリス・フランス
ロンドン / リーズ（イギリス）：
テート・モダン：「ターナーとコンスタブル展」にて、光が大気と精神へ昇華される過程を分析。
リーズ・アート・ギャラリー：「Nocturnes and Atkinson Grimshaw」展。夜景・月景画の系譜を詳細に調査し、自身の制作テーマとの接続点を見出す。
ヘンリ・ムーア・インスティテュート： 身体感覚と空間の関係を視察。
パリ（フランス）：
ルーブル、オルセーを再訪し、ニコラ・ド・スタール（パリ市立近代美術館）等の調査を通じ、具象と抽象の境界における風景表現を追求。

７　研究結果・成果

(1) 各国美術館調査による風景画の精神性の考察
欧州諸国における主要美術館・画廊を巡り、写実主義から象徴主義、表現主義に至る風景画の変遷を、作品の鑑賞を通じて多角的に調査した。

■ イギリス：光の物質性と「記憶」としての風景（ターナーとドイグ）
ロンドンを中心に、英国風景画が辿った「光」の進化と、現代における風景の再構築について考察した。
ターナーとコンスタブル（テート・ブリテン等）：J.M.W. ターナーの調査では、光が形態を溶かし、大気そのものが精神的なエネルギーへと変容していく過程を分析し

た。ターナーにおける光は、もはや物質を照らすための道具ではない。それは自然の圧倒的な力や人間の内面を象徴しているようにもみえる。また、空気そのものを描くようなあの手法は、日本の《松林図屏風》にも通じるものがある。観る側が霧や光の中に何かを「自ら探り出す」よう促しているのだ。このような表現は「その場の気配」を強く漂わせ、のちの抽象画や現代の精神的な風景画へとつながる重要な架け橋になっていると確信した。
ピーター・ドイグ（サーペンタイン・ギャラリー）：現代風景画の旗手、ピーター・ドイグの調査では、風景が「実際の場所」から「個人的な記憶や映画のワンシーン」へと組み替えられるプロセスに注目した。ドイグの作品に見られる、現実と夢の間を揺れ動くような色使いや質感は、現代の風景画が「目に見える世界の再現」ではなく、「脳裏に焼き付いたイメージの定着」であることを示している。自身の制作テーマである「心の揺れ」を形にする上で、大きなヒントを得ることができた。

■ ドイツ：ロマン主義から「心的リアリティ」としての現代絵画へ
ベルリン、ドレスデン、ライプツィヒの三都市を拠点に、ドイツ美術における「内省」の系譜を調査した。
ドイツ・ロマン主義の再考：ノイエ・マイスター絵画館にてカスパー・ダーヴィト・フリードリヒの『月を眺める二人の男』やヨハン・クリスチャン・ダールの『ドレスデンの夜景』を現物調査した。自然を単なる客観的対象としてではなく、自己の精神を投影する「鏡」として描く独得の描写を分析。特に「夜」や「月光」が、崇高（Sublime）への畏怖と内面的な孤独を媒介する装置として機能している点を考察した。
新ライプツィヒ派と重層的技法：G2 美術館（ヒルデブランド・コレクション展）やシュピネライ（Spinnerei）のギャラリー群において、ネオ・ラウフやマティアス・ヴァイッシャーらの作品を精査した。戦後の社会的・政治的混迷が作家の「心的リアリティ」に与えた影響を分析。彼らの重厚かつ重層的な油彩技法が、過去の記憶と現代の風景を一つの画面に定着させ、複雑な精神性を表出させるプロセスを作品から検証した。

■ フランス：光の変容と内面性への沈潜
パリの主要美術館（ルーブル、オルセー、オランジュリー等）を網羅し、近代美術における「光」の概念の変化を追った。
印象派から象徴主義への昇華：光が単なる網膜的な現象から、作家の主観によって変容し、精神性を映し出す媒体へと進化した過程を考察した。特に象徴主義における光の扱いは、写実を離れ、内面的な感情を露わにするための「情緒的色彩」へと接続されている点に注目した。
形態の解体と再構成：ピカソ美術館やロダン美術館での調査を通じ、キュビスムや彫刻における形態の解体が、いかに見る者の精神に直接的な揺さぶりをかけるかという点について、表現の強度の観点から知見を深めた。

■ イタリア：古典の精神性と歴史的プロセス
ミラノ、フィレンツェ、トスカーナ地方を巡り、西洋絵画の根源的な精神表象を調査した。
宗教的表象の極致：サン・マルコ美術館の「アンジェリコ展」等を通じ、ルネサンス初期の純粋な信仰心に基づく光と色彩の扱いを鑑賞した。これらの古典作品が持つ、静謐ながらも力強い精神性は、現代の「心的表象」を構築する上での揺るぎない基礎であることを再確認した。

■ アイルランド：風土・歴史とコミュニティへの参与
ダブリン（IMMA、ダグラス・ハイド・ギャラリー等）の調査と、ウイックローでのグループ展参加を実施。
風土の投影と双方向の対話：アイルランド特有の雄大な自然と複雑な歴史が、現代の風景表現にいかに刻まれているかを考察。自らも制作者としてコミュニティに身を置き、現地の作家やキュレーターと対話することで、自身の描く風景が文化的背景を超えて「普遍的な精神の風景」として共鳴し得るかを実践的に検証した。

(2) ロンドン（フローレンストラスト）における実践的制作
本派遣の拠点としたロンドンでは、歴史的な教会建築を利用したスタジオ「フローレンストラスト」での滞在制作を行った。
生活と地続きの実験的制作：本拠点での制作は、単なるアトリエ作業ではなく、ロンドンの地で生活を営むこと自体をプロセスとした。異郷での日々の暮らしの中で生じる「心のちいさな揺れ」を拾い上げ、制作へと反映させた。教会の静謐な空間に身を置き、都市生活の中で心の底に沈殿した（言語化し得ない微細な実感、あるいは記憶の断片）を、重層的な色の重なりとして画面に定着させる試みを行った。
対話を通じた洞察とクリット（講評会）： フローレンストラストはロンドン外にルーツを持つ作家も多く制作しているレジデンスであり、多様な背景を持つ現地の作家と対話を重ねた。定期的なクリットでは、自身の制作過程における無意識的な選択が、いかに「心のリアリティ」を強固にするかについて、他者からの批評を通じて深い気づきを得ることができた。
理論の再構築：ターナー、ドイグ、フリードリヒといった各国の調査で得た資料を基に、パウル・クレーが提唱した「見えるようにする」芸術概念を現代の視点で捉え直した。これにより、独自の風景表現を論理的に組み立てる有意義な機会となった。

(3) リーズ大学での個展開催と国際的検証
本研究の目的であった「心の表象（イメージ）」の有効性を立証するため、派遣期間の集大成として、リーズ大学にて個展を開催した。
研究の総括：欧州各地での調査とロンドンでの制作を経て生まれた新作群を発表した。

客観的知見の獲得：現地の学生や研究者、一般の鑑賞者から多くの反応を得ることができた。自身の描く「風景」を通じた精神的な表現が、文化の違いを超えて鑑賞者の内面にどのように伝わり、共鳴を生むかを確認できたことは、本研究の独自性を裏付ける大きな成果となった。これは日本での「心のリアリティに重きを置いた絵画表現」を確立する上で、極めて重要な客観的データとなった。

(4) 今後の展開・発展

本派遣で得られた膨大な作品データと実地制作の経験は、今後の制作・研究活動における確かな土台となる。

1. 調査成果の作品化：伝統的な風景論と現代的な技法の融合

「内省的風景」の深化：フリードリヒやグリムショーの調査で得た「月光」や「夜景」の分析を踏まえ、現代の都市や自然の中に潜む静寂を描き出すシリーズを制作する。

マチエール（質感）の探究：画家たちから学んだ様々な油彩技法を取り入れ、単なる風景の再現ではなく、心の揺れや記憶の重なりを「絵具の層」によって表現する独自のプロセスを確立する。

2.「普遍的な地下水」を通じた国際的な対話の継続

アイデンティティの差異を認識した一方で、その深層には国籍を超えて響き合う「共通の精神性」が、地下水のように繋がっているという確信を得た。

ロンドンを拠点とした継続的な発信：フローレンストラストでの経験を糧に、今後も欧州のアートシーンで作品を提示し、鑑賞者の反応を直接確認する機会を持ち続ける。私的な「心のちいさな揺れ」から出発した表現が、どのように普遍的な共感を生むのかを検証し続けたい。

多文化的な文脈における「響き合い」の追求：異なる背景を持つ人々との対話を通じ、表面的な違いの奥にある、人間共通の孤独や平穏、自然への畏怖といった「地下水」を掘り当てるような表現を追求する。この双方向のプロセスこそが、今後の制作活動の大きな原動力となる。

3. 理論と実践を架橋する独自の風景表現の確立

「心的リアリティ」の追求：外側の世界を真似るのではなく、個人の心と外部世界が触れ合う境界線を視覚化する「心のリアリティ」としての風景画を提唱し、新たな風景表現の可能性を示していく。

制作プロセスの言語化と発信：レジデンスでの経験を活かし、制作意図を論理的な言葉で発信することで、国内外の専門家とのネットワークを構築し、活動の幅を広げていく。

補足事項：”様式 C 海外派遣研究員出張計画書”に記載のない都市について

当初の計画に加えベルリン、ドレスデン、ミラノ、ウイックローを訪問した。研究を進める中で研究テーマである「風景画における精神の表象」をより深く検証するに

は、各地の美術の歴史や現地の現在の状況を直接的に確認することが必要だと判断したためである。以下にそれぞれの訪問理由と研究に与えた成果をまとめる。

1. ドイツ（ベルリン・ドレスデン）：ドイツ・ロマン主義と現代絵画の源流調査理由と妥当性： 「風景への精神投影」という研究テーマを、ドイツ・ロマン主義の作品を調査することの必要性は考えていたが、研究を進める中で特にC.D.フリードリヒらの作品調査は避けて通れないと思い、ベルリン、ドレスデンにも作品が多くあることを知り派遣先に追加した。また、現代絵画において「心的リアリティ」を表現する新ライプツィヒ派の背景を学ぶには、その社会的背景を含めた直接的な美術環境（ギャラリーやスタジオ）の視察が必須であったため、ベルリン、ドレスデンを訪問先に加えた。
成果への影響： 独得の「内省的な風景」の歴史を肌で感じたことで、知識としてだけではなく、光や夜景が「崇高」を媒介する装置として機能する論理的裏付けを得た。この経験は、自分自身の今後の作品制作を支える強い理論的な土台となった。

2. イタリア（ミラノ）：古典的表象から現代的空間構成への変容の検証
理由と妥当性： 西洋絵画における空間と形態の変容を考察する上で、イタリア美術は古典と現代をつなぐ重要な役割を持っている。特にブレラ絵画館やプラダ財団での調査は、20世紀以降の形態解体と精神的表出が、現代の展示空間においていかに再解釈されているかを検証する上で重要な指標となった。
成果への影響： 伝統的な宗教画から現代の展示までを横断的に見ることで、自身の作品が位置する「風景画の現代的な可能性」が持つ可能性を客観的に捉えることができた。

3. アイルランド（ウイックロー）：表現の普遍性の検証と国際的対話
理由と妥当性： 当初ダブリンのみの調査の予定であったが、ダブリンは都市としての側面が強く、滞在先としていたロンドンと類似した文脈にあると感じた。研究目的である「精神の表象の普遍性」を立証するため、自然環境と歴史的背景が現代の生活と密接に結びついた地域での調査が必要であると感じ、折しも以前アイルランドで交流した作家からの招待によりウイックローでのグループ展に参加する機会を得たことは、自身の表現が異なる文脈においても成立するかを試す機会であり、渡航先を追加した。
成果への影響： 地域特有の風土やコミュニティの中で作品を公開したことや現地作家や鑑賞者との対話は、都市部とは異なる視点でのフィードバックをもたらした。文化や背景が異なる地において自身の作品が受容される過程を経験できたことは、研究テーマである「精神の表象」が普遍的な共鳴を生むという仮説を裏付けられるのではないかという実証的な成果となった。

（ 様式D−２ ）

総括： 以上の都市を調査行程に組み入れたことは、当初の計画を補完し、研究テーマに対する多面的な解釈を可能にした。結果として、理論的調査（歴史的調査）と実践的制作（現地制作・展示・対話）の双方において、より説得力のある帰結を導き出すことができた。

以　上